

中高一貫校における「現代文」の授業

——「中だるみ」の生徒を引きつける「詩の授業」の戦略——

大 貫 眞 弘

一 中高一貫校人気の背景

少子化の中、いわゆる「中高一貫校」の人氣が急上昇している。

二〇〇五年度、一都三県（東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県）の小学六年生が私立中学を受験した人数は、児童数二八万二千人に対して、四万七千人だった。昨年より児童数が約三千人減少する中、受験者数は二千五百人余り増えている。率にすると昨年の一五・二％を上回り、過去最高の一六・二％を記録した（大手学習塾「日能研」調べによる）。これは一人で複数校受けた場合も「一人」と数えた実人数に拠る計算なので、実際に六人に一人が中学を受験したことになる。東京都に限れば二〇％を超えており、五人に一人が中学受験をしたことになる。

受験率の上昇が顕著になり出したのは、新学習指導要領の実施をめぐって「ゆとり教育」への批判が始まった一九九九（平成一一）年度からである。このことから、中高一貫校に求められているのは、充実した教育の提供だということが推測できる。そして、

その期待に中高一貫校は応えている。

東京大学の「学生生活実態調査」（二〇〇二年一月実施）によると、東大生（学部生）の出身高校は、私立の中高一貫校が五〇・三％、国立の中高一貫校が一一・八％、公立高校が三三・三％という結果だった。私立及び国立の中高一貫校出身者が六二・一％を占めている。一方、公立高校出身者は、昭和六三年の四七・六％に比べて大幅に減少したことになる。私立大学では、早稲田大学と慶應義塾大学を例に挙げると、両大学ともに、高校別合格者数の上位一〇校中八校が中高一貫校の卒業生である。

このような流れの中で、東京都では初の都立の中高一貫校である白鷗高校附属中学校が二〇〇五年四月に開校した。それに続き、二〇〇六年度は四校が、二〇一〇年までにさらに六校が開校される予定である。これらの学校は、高等学校の形を保ったまま「進学重点校」と位置づけられたいわゆる「都立トップ校」に次ぐ「一番手進学校」が主に再編されることになったものである。

一方で、京都府では府立洛北高校が二〇〇四年度から、そして

千葉県では県立千葉高校が二〇〇八年度から中高一貫校となる。これらの学校は地域で最も歴史と伝統のある進学校である。

二〇〇五年度の時点では、国公立の中高一貫校は一二三校が開校されており、今後も増えることは間違いない。これらの事実から明らかなのは、今や中高一貫校は、進学指導については「成功したシステム」だという評価がなされているということである。

二 中高一貫校の宿痾たる「中だるみ」

そのような中高一貫校に、子どもたちはどのような経緯で志望し、受験し、入学するのか。それは親の影響が大きいようである。

「高校受験の苦勞をさせたくない」「ゆとりのある中学高校生活を送ってほしい」「先取り学習で学力をつけて、現役で難関大学に入ってほしい」「新指導要領実施に伴う学力低下が不安である」という親の思い、また大学附属校の場合は「高校受験、大学受験の苦勞をさせたくない」という親の願いが子どもたちを中学受験へと向かわせる場合が多い。

つまり、中高一貫校に入るための勉強は、子どもが自発的に中高一貫校を志して勉強するということは少ないのである。大抵の場合は、親が子どもに、親の願いに沿った学校を受験させるもので、そのための勉強もまた、親が子どもに仕向けるものなのである。そこには子どもの選択はほとんど介在しない。私の勤務校にも親子で学校見学に来ることがある。その場合、熱心に授業や施設を見学するのは親で、子どもは見学などする気はあまりなく、早く帰りたいという素振りを前面に出していることが常である。

親の仕事は、第一に、親が気に入った学校を我が子にも「気に入ってもらふ」ことであり、第二に、その学校に向けて受験勉強を「してもらふ」ことなのである。

次に引用するのは、中学三年の二学期終了時、生徒に課した『中高一貫校の中学三年生としての自分』というテーマで、思うことを書いてください」という課題に対して、生徒が書いた文章からのものである。

塾の先生や親は「合格さえすればあとは天国よ。何でも好きなことできるわよ」と私を言い聞かせたし、私もそれを疑うことはなかった。(中略) 勉強しなくていいとか最高じゃない！なんて考えていた。(A子)

私がこの学校に入りたいと思った動機は特になかった。ただお母さんがとてもいい学校だとすすめてくれたので私はこの学校を受験することにした。(B子)

子どもは、このような親の希望に健気に応え、熱心に勉強する。小学校の時の受験は今思い返すと良い思い出だが、当時はとても辛かったのを鮮明に覚えています。まだ12歳だし、目標もなかなか見つけられず、何より一番イヤだったのは友達との遊びのおさそいを断って塾に行かなければいけなかったことです。(C子)

小学校の時になんで勉強しなきゃいけないのか、とか、中学から私立に入って何の得があるのか、とか、よく思っていました。(中略) 私の小学校は一学年62人に対して受験をする人がたったの3人しかいませんでした。だから学校帰りと

かみんなにまぎれて遊びたかったので、塾を遅刻するくらいまで遅く学校に残って遊んでいました。(D子)

これらの生徒の作文を見ると、中学受験を「させられた」不幸な生徒像が浮かんでくる。しかも、「合格さえすればあとは天国よ。何でも好きなことできるわよ」という言葉は事実ではない。次の引用は、先のA子の作文の続きの部分である。

別に中学生生活は天国ではなかった。勉強しなくていいなんて真つ赤な嘘。だんだん授業スピードは速くなるし、テスト範囲は長くなるし、いいことだけど、勉強が習慣になりつつある。これが厳しい現実。

しかし、早くて入学直後、遅くても中学三年になると、生徒たちは、中高一貫校に入るための中学受験を肯定的に捉えるようになる。その一番の理由は、高校受験がないことである。

この学校に入学して、六年一貫だから高校受験をしなくて良かった。中学二年生の時、友達の状態を見て率直に思ったことだ。(E男)

まあ今考えれば、あのときの苦しみや我慢や悔しさは「合格したときの喜び」と「高校受験をしなくて良い」というステキなプレゼントに変わったのかなぁなんて思ったりします。今地元の公立に通う子はみんな必死に高校受験に向けて勉強をしています。中学受験とは違い、英語などの科目も増え、内容もどんどん難しくなっていることでしょう。そんな中私はのんきに次の期末の心配だけをしていて。でもそれは中学受験を頑張ったからこそできることなんですよね。一生

懸命勉強をしている地元の子たちを見ると全然楽ちんな自分がときどきいやになっちゃうときもあるけど、よくよく考えると受験をしてホントに良かったと思っています。(C子)

あの頃とは違って、自分の行動範囲がすごく広がった。そして楽しいこともいっぱい見つけた。そんな今の状態で勉強に打ちこむ、なんて私にはムリだ。こんな私の性格だからこそ中高がつながっていて良かったと思う。あの塾が楽しいと感じるときに受験できて、高校受験をする必要がない。うん。楽でいい。(F子)

これらの生徒の作文に見られるように、中高一貫校の中学三年の生徒たちは高校受験がないことで気が緩んでいる。いわゆる「中だるみ」である。

この時期は、教師が生徒にどれだけ徹を飛ばして活を入れても効果をなさないことが多い。それは、生徒たちも、今の自分たちが「中だるみ」の最中であることはよく認識しているからである。

僕は中1の後半から今(筆者註Ⅱ中3)までずっと中だるみが続いています。中1の前半はきんちようかんがあったので勉強も学校生活もまじめにやっていました。しかし、とちゅうから「なんでこんなにまじめにやってるんだろう?」と思うようになり、勉強もそれ以前に比べるとあまりやらなくなっていました。(G男)

この「中だるみ」という現象は、学校のレベルや地域に関わりなく、どんな中高一貫校にも起こる、中高一貫校の宿痾とも言えるべき問題のようである。中学校であれば中学二年、高等学校であ

れば高校二年にも「中だるみ」は起こるが、中高一貫校における中学三年と高校一年を中心時期として起こる「中だるみ」の「たるみ具合」はその比ではないことは想像にたやすい。

では、概して、中高一貫校に入学した生徒はどのような学校生活を送ることになるのか。よくあるパターンを記してみたい。

中学入学後の一年のうちはまだ緊張感を持っており、中学二年の前半までは生徒は宿題や部活動をすべて含めた「学校生活」に適應するのに精一杯である。それに、学力上位校の場合は、入学者はそれぞれの小学校での成績最上位者たちであり、「自分は小学校ではトップだった。だから当然ここでもトップになるのだ」という気概を持っていることが多く、比較的熱心に勉強する。

これが中学二年の後半になると、進度の速い授業と大量の宿題、各科目の小テスト、部活動で遅く帰宅する毎日に息切れする生徒がはじめる。勉強面では、自分は「神童」ではなく「ただの人」だったのだと気づくようになる。加えて、学校への慣れが悪い方に働く。具体的には、小テストや定期テストは目標とするには小さすぎて、悪い点を取っても放校させられるわけではないと高をくくるようになる。親によって中学入試に燃えさせられた生徒たちは、「入試」程度の大イベントでないとやる気にならなくなるのである。しかし高校入試はなく、高校卒業後の進路のことはまだ考えるに及ばず、何のために勉強しているのか分からなくなってくる。目的意識の欠如という状態が起こる。この「目的意識の欠如」が、「中だるみ」の最たる原因なのだと考えられる。

高校二年になると、女子生徒の半数が高校卒業後の進路を意識

し始める。そしてだんだんとその意識が生徒に広がる。男子には高校三年の夏休みまで「中だるみ」が続く生徒もいる。「中だるみ」の原因の追究は総合的な観点からなされる必要があるだろうが、私が携わった複数の中高一貫校の様子をもとに考察すると、進路、そしてその多くは大学受験という目的意識を持ち始めたときに「中だるみ」が終わるというパターンが多い。

三 「中だるみ」と現代文の授業

この「中だるみ」現象を打開するために多くの中高一貫校が知恵を絞っている。例えば、高校入学時に「実力判定テスト」なるものを行うことで生徒の緊張感を高めることを図る学校がある。

また、若干名を募集する高校入試を行い、「外の血」を入れて沈滞ムードを打破することを図る学校もある。この時期に職業教育を取り入れ、職業に対する意識を高めることで、将来に向けての目的意識を喚起させようとしている学校もある。

しかし、第一の例でいえば、「実力判定テスト」の結果の如何によらず高校に進級できることは決まっているのだから、「実力判定テスト」は生徒にとつては定期テストと変わりはなく、緊張感が高まらない。第二の例でいえば、大抵、高校一年の初回の定期テストでは「外の血組」の方が内部進学組よりも平均点は高くなる。しかし内部進学組はせいぜい「どうせ俺たち中だるみだもん」と自嘲するか、「先生の教え方が悪いからだ」と責めるかするだけである。そして、「外の血組」も、高校二年になれば内部進学組と同化していく。第三の例でいえば、たとえこの時期に職

業に対する意識が高まったとしても、そこから「一つ一つの教科の授業をきちんと受けよう」という意識には、まず結びつかない。

このような中で各教科の授業が行われる。中でも現代文は生徒からは「授業が点に結びつかない教科」「何をどう勉強したらいいか分からない教科」「授業の内容と関係のないことがテストで出される教科」という評価がなされている。この問題を抱える現代文という教科に、「中だるみ」の生徒はどう向き合って対処しているか。表現活動を例に述べることにする。

表現活動では、「やつつけ」の作業で課題を提出する生徒が増えるという現象が起こる。作文を書かせる作業や、詩歌を作る課題を出すと、テーマに関わらず、字数制限や「季語を入れる」などの外形的な条件だけを片づけて提出する生徒が増えてくる。

例えば、中学三年か高校一年の二学期に、「夏休みの思いを俳句にしてみよう」という課題を出すと、「夏休みああ夏休み夏休み」という俳句を作る生徒が三、四人は出てくる。教師が見れば「やつつけ」で書いたことはすぐに分かる。が、生徒が「夏休みが終わってしまふ悲しさをもって一生懸命書きました」と言えば、教師は内心では「そんなわけないだろう」と思っても、そう言ったところで生徒に「僕の努力を認めてくれないんですか」と言い返されるだけである。ここで教師が怒りをこらえて「この部分はこうすればもっとよくなるんじゃないか？」などと建設的に助言しても、生徒から「ならそう書き直せば受け取ってくれるんですね」と返答され、助言するのが馬鹿馬鹿しくなってくる。

このように、「中だるみ」期の生徒の学習意欲のなさと、何の

ためにやるのかわからない（と生徒が思う）課題を出されたときの誠実さに欠ける態度は、生徒によってはかなり悪質である。

「中だるみ」の根本を外から解決させることは不可能に近い。しかし、「中だるみ」の生徒でも引きつけられる授業を展開することは可能である。では、「中だるみ」の生徒でも引きつけられる授業とは、どのような授業なのか。具体的には、第一に「表現活動を頻繁に取り入れること」、第二に「内省的になるように仕向けること」、この二点を授業で行うことが必要だと考えている。

第一の「表現活動を頻繁に取り入れること」については、読解作業が主である学習では、生徒はどうしても受身の立場を強いられる。「中だるみ」の生徒の側に立てば「受身の立場でいれば済む」という状態から引きずり出すためには、表現活動を頻繁に取り入れるのが最も手っ取り早い方法である。

しかし表現活動を頻繁に取り入れたからといって、やみくもに書かせるだけでは「やつつけ仕事上手」を量産するだけである。「やつつけ」では済まされない課題とは、生徒が自分自身を内省的に考えざるをえなくなる課題である。それが第二の点である。

国語ではスピーチ、ディベート、プレゼンテーション、レポート作成など、「外」に向けて発信する学習活動を多く行う。しかし生徒が作り上げたものを見てみると、どこかの資料をコピー・ペーストしたもの、ニュースキャスターのコメントそのままのもの、具体化不能な空想論、当の生徒自身の現状とは程遠い道徳論など、よく考えもせずに作ったものであることが多いと常々感じ

ている。そこで私は、この時期の生徒がすべきなのは、外向けに発信する作業よりもむしろ内省的にじっくりと考える作業ではないかと考えている。

もちろん、すべての生徒が「やつつけ」ではなく真剣に作業する課題を考えることができればいいのだが、現実としてそれはまず無理である。したがって、真剣に作業する生徒の量的な率、また一人一人の生徒が持つ真剣さの度合いという質的な率をできるだけ高める課題を考えるというのが、特に「中だるみ」の生徒を相手に授業を行う教師の課題となるのである。

四 「アンサー・ポエム」を創る

私は今年度、高校一年の担任を持ち、週三コマの「現代文」の科目を三クラス担当することになった。そして、二学期の後半に、詩の授業を行うことになった。

詩の授業というのは、厄介者扱いされることが多い。その理由は、教科書に載せられている数編の詩で何を教えればいいのかが分からないからである。音読を行い、作者の背景を資料集で確かめ、教師が解釈や鑑賞をする。定期試験では作者名と詩の形式（「口語自由詩」など）を問い、鑑賞は自由に書かせると正解不正解の判断に困るので選択肢で選ばせる、というあたりが多くの学校で行われている授業ではないかと思われる。

そこで今回は、詩の学習をする際に「表現活動を行う」「内省的になるよう仕向ける」という二点を含む計画を作り、実践を試みた。定期試験には出さない、ということも決めておいた。

詩の授業でよく行われる表現活動は、感想文・鑑賞文を書かせる作業だろう。しかし、高校一年生ともなると、何も考えなくても、「やつつけ」でそれらしい文章が書けてしまうものである。次によく行われていると思われる詩の創作も、生徒はただ思いをだらだらと書き連ねて「詩」として提出して終わる場合が多い。

そこで今回は、「アンサー・ポエム」を創って読み合おう」という単元を設定した。指導の手順は次の1〜7である。指導に要した時間は四時間である。1・2を第一時、3を第二時・第三時、5・6・7を第四時に行った。

1、たくさん詩をプリントにして配付する。
2、音読する。

3、生徒各自で「アンサー・ポエム」の創作をする。

4、生徒が創作した「アンサー・ポエム」をクラス全員分、教師がワープロで活字化し、プリントにする。

5、プリントを配付し、読んで話し合う。

6、うまいと思った「アンサー・ポエム」を選びその理由を書く。

7、自分の創った「アンサー・ポエム」を振り返り、良かったところや改善点などを書く。

1については、各社教科書から抜粋し、二十二編の詩をプリントにして配布した。それは次の通りである。谷川俊太郎「かなしみ」「芝生」「今日」、吉野弘「was born」「みずすまし」、石川啄木の歌「不來方のお城のあとの草に臥て／空に吸はれし／十五のころ」、三好達治「螢のうへ」、山之口獭「ねずみ」、寺山修司「十五歳」、田村隆一「木」「帰途」、萩原朔太郎「旅上」「死な

ない蛸」、高村光太郎「ぼろぼろな駝鳥」「冬の奴」「冬が来た」、中原中也「湖上」「生ひ立ちの歌」、井伏鱒二「厄除け詩集」より「春暁」「静夜思」「田家春望」「飮酒」。

3が今回の授業の核である。これについて詳述する。

今回、詩の創作をさせるに当たり、何点かの「縛り」を設けた。それは次の点である。

①プリントで配る近代詩のうちのどれかを「踏まえる」こと。

②詩の長さは四行であること（一行は二〇字）。

③いきなり清書するのではなく、下書き用紙（配付）に必ず下書きをすること。

④自作の詩とともに、その詩はプリントで配る近代詩のどこを「踏まえた」もののかを書くこと。

⑤自作の詩はクラスの生徒全員に読まれるということを承知しておくこと。

次にこれらの「縛り」の意味を説明する。

①は、全く自由な立場で詩を書かせても「やつつけ」の詩が量産されるだけなので、その防止策として設けた「縛り」である。

また、今回の詩の授業は、「近代詩の鑑賞」というのが建前上の主たる活動であり、このことと創作との間に何らかの関係を持たせるためでもある。問題は「踏まえる」という言葉の意味であるが、ここでは、歌謡曲に「アンサー・ソング」と言われているものがあることをヒントにした。

「アンサー・ソング」の定義は、管見では誰によってもなされてはいないようだが、「替え歌」とも「パロディ」とも違い、すで

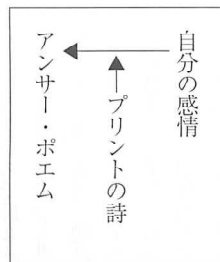
に存在する歌の「内容」（テーマや歌詞の言葉）か、「形」（メロディや歌詞の調子）を踏まえてさえいれば「アンサー・ソング」として認められているようである。

「すでに存在する歌」と「アンサー・ソング」との関係は、次のような図で表すことができる。



一例を挙げれば、さだまさしの歌『関白宣言』は、結婚を前にした男が相手の女性に向けて「亭主関白」となることを宣言しつつも、自分のもろさや弱さ、相手への深い依存心を垣間見せ、不器用な愛情を吐露していく歌である。この歌のアンサー・ソングと言われているのが平松愛理の歌『部屋とYシャツと私』である。この歌は、結婚を前にした女が相手の男性に向けた歌であり、『関白宣言』のテーマを踏まえていると言える。

今回は、生徒には、プリントで配る近代詩に多くを依存させないようにするために、次の図を板書で示した。



「アンサー・ソング」の図とは、「自分の感情」の位置が異なっている。つまり今回は、なかなか言葉に表すことができない感情、うまい言葉が見つからない感情というものが己の中にあり、その感情を表現するために、プリントで配る近代詩を「踏まえる」という形式にした。どのように「踏まえる」かは、自由とした。つまり、テーマを「踏まえて」もよし、詩の中の一単語を「踏まえて」もよし、リズムを「踏まえて」もよしというわけである。

②の「詩の長さは四行であること」は、長さを自由にしてよいと言うと冗長緩慢な詩が増えるだけなので、行数を制限して言葉を精選させることを目的としたものである。「四行」としたのは、統一した条件を設定した方が完成された詩を比べやすいからで、また四行詩という定型のジャンルが存在するからである。

③の「いきなり清書するのではなく、下書き用紙(配付)に必ず下書きをすること」は、「やつつけ」で書かせないための策である。言葉を精選したり、四行にまとめたりする過程の中で、下書きをしないで済むはずがない。下書きをすれば「やつつけ」でなくなるといふ保証はないが、このように指示することが、「や

つつけ」では許さないという教師の決意表明になる。

④の「自作の詩とともに、その詩はプリントで配る近代詩のどこを『踏まえた』ものなのかを書くこと」は、具体的にどこを踏まえているとも言えないのに印象だけで踏まえた気になっている生徒が出てくるのを防止するための策である。

③と④の作業のために配付したワークシートは、B4判を縦長に使ったもので、上半分(B5判横長の大きさ)は全て③のための下書き欄、下半分(B5判横長の大きさ)は左右に分け、左に④の内容、右に四行詩を書かせるという形式のものである。

⑤の「自作の詩はクラスの生徒全員に読まれるということを知しておくこと」は、生徒によく考えて創らせるための警句である。ただ、プリント化する際に、創作した生徒の名前を載せるかどうかについては時と場合に応じて考える必要がある。

本来なら、自分で書いたことに責任を持たせる必要性から、書いた生徒の名前も公表すべきであろう。しかし、今回は内面の表白を詩に表すという性質上、「名前を出されると思い通りのことが書けない。しかし自分の名前が知られなければ書ける」という生徒が多かったことから、名前を出さず、さらにワープロで打つことによって筆跡も分らないようにした。ここで名前を出すことは、生徒に思い通りに書かなくさせるだけでなく、「思い通りに書けないのなら『やつつけ』で書いても同じことだ」と思わせたいという点でマイナスである。また、読む側は、詩の内容を注視せず、誰が創ったのかということばかり興味が向いてしまう。このことは読み合う学習にとってもマイナスである。

4の「ワープロ打ち」の作業をしたのは、右に記した理由による。B4判一枚にクラス三十九人の詩を載せてプリントにした。

5は、生徒が一番楽しんで行う作業である。生徒は配られたプリントをしばらく無言で読み、読み終わると近くの席の友達同士で感想を話し合い始める。創ったのが男子か女子か、仲良しかどうかも分からない「クラスの誰か」が創った詩について、作品本意の中立的な立場で話し合う。このとき、教師が何も言わずとも、生徒たちは良いと思った詩を賞賛するための話し合いをする。普段は目立たない生徒の作品が一隅で話題に上がり、それを漏れ聞いた作者の生徒が嬉しそうな顔をする場も見かける。

この「クラスの誰か」が創った詩を媒介とした話し合い（賞賛し合い）の作業、そして自分の創った詩を賞賛してくれているのを漏れ聞くことは、名前が公表されないからこそ可能なものであり、これはクラスという閉じられた空間の中での貴重なコミュニケーション活動である。

6は、率直に感じたことを面と向かっては言いづらくても、書くことなら抵抗が少なくと考えて設定したものである。

それぞれのクラスで最も評価が高かった「アンサー・ポエム」は、次の作品だった。「イ組」では、中原中也「生ひ立ちの歌」のアンサー・ポエムで、題は「夏秋冬、そして春」である。

君は歩く、汗ばむような暑さの中、緑の路を

君は歩く、美しき衣がえの中、赤の路を

君は歩く、幻想的な風花の中、白の路を

君と歩く、昨日とは違う、この桃色の路を

「ロ組」では、田村隆一「帰途」のアンサー・ポエムで、題は「残響」である。

立ち止まれば取り残されてしまう

憂鬱と欲望ばかりが廻る理不尽な世界

その檻の中で君は溶けて逝った

ありふれた日常に染まる僕を残して

「ハ組」でも、田村隆一「帰途」のアンサー・ポエムで、題は「無能」である。

言葉なんて無能だ

だって僕のこの単純な気持ちすら表せない

言葉なんて無能だ

だから言葉に寄生する僕らも無能だ

7は、作りつばなしにさせず、真剣に、具体的に振り返らせるためのものである。

改善点で多かったのは、自身の詩の言葉への改善案で、「最初の『ぼくら』を『ぼく』にすればよかった」「忘れる」という言葉を『見失う』に変えた方がいと思った」などである。次に、クラスメイトの詩を読んで気づいたもので、「別の人が使っていた『しめやか』という言葉が合っていたので、それを使えばよかった」「自分の語彙力のなさがよくわかった」などである。

中には「掛詞を使ったつもりだったのにそれが伝わっていない気がした」「比喩表現は使いすぎるとうまく伝わらない」など、レベルの高い改善点に気づいているものもあった。そして、「題名を適当に考えていた」「書いていてよくわからないけど、ま

「あいいや」と思って提出したのが本当のところだった」と、「やつつけ」であることを告白しているものもあった。

最後に、次のことを生徒に問うて書かせた。

第一に「自由な立場で詩を創作するのと、今回のように別の詩を踏まえて詩を創作するのでは、どちらが創りやすいか」。

第二に「字数や行数を自由に詩を創作するのと、今回のように制限された行数で詩を創作するのでは、どちらが創りやすいか」。

第三に「自由な立場、自由な字数で詩を創作するのと、今回のように制限された中で詩を創作するのでは、どちらが結果として良い作品を創れると思うか」。

結果は、第一の問に対しては「自由な立場」と「別の詩を踏まえて」の比は三対七だった。「自由な立場」派の主な理由は「プリントの詩には踏まえられる詩がなかった」というものだった。

「別の詩を踏まえて」派の主な理由は「表現のヒントをもらえる」という種のものであった。

第二の問に対しては「字数や行数を自由」と「制限された行数」の比は二対八だった。「字数や行数を自由」派の主な理由は「行数ばかりを気にしすぎてしまう」というものであった。「制限された行数」派の主な理由は「一つ一つの言葉、文節、修飾関係などを工夫できた」「いかに読者に気持ち伝わるかをよく考えることができた」「言葉を選ぶことを大切にできた」というものだった。ただ、「行数は制限された方がいいが、四行というのはさすがに短すぎる。もう少し欲しい」という意見も複数あった。

第三の問に対しては「自由な立場、自由な字数」と「制限された中で」の比は三対七だった。「制限された中で」派の主な理由は「始めはとまどったが、できあがてみると良いものができていた」「始めは書きにくかったが、言葉を選ぶ時に助けになって良いものになった」「制約がないとだらだらしてしまう」というものだった。

これらの生徒のコメントから、生徒たちは教師の目論見通り、「縛り」の中でもがきながら、良い作品になるよう工夫していたことが分かった。そして提出されたものを見ると、詩の創作から振り返りの作業にかけて、今までよりも内省的に考えていたことは多分に感じられた。年間学習計画にあらかじめ予定されていた詩の授業という枠の中で、表現活動を取り入れ、内省的になるように仕向けることは一応はできたようである。

五 結語

中高一貫校の現代文の授業は、教科書で対処しようとするとかなりの困難が生じる。その理由は第一に、同一の出版社のものでさえ中学版と高校版とが内容的に断絶されている現行の教科書では、「中だるみ」が中学と高校とをつないでいる中高一貫校には対応しきれないからである。

第二に、教科書の文章や学習課題は退屈かつ抽象的なものが概して多いからである。具体的な活動内容もあるが、それも例えば「私の大切なものを紹介しよう」など、「こっこ遊び」じみていて、「中だるみ」の生徒が本気でやろうと思えるようなものではない

のである。生徒は「私の大切なものを紹介しよう」誰に？へ友達に「何のために？」「スピーチする」どうしてそんなこと私がしなきゃならないの？ そんなことしたから何になるっていうの？」と疑問を抱く。そして疑問が解決できなかつたり納得がいかなかつたりすることがあると、途端にやる気をなくす。そうすると、適当に感動的な話をでっち上げて、そつなくまとめる作業に取りかかるのである。

相手は目的意識が欠如した生徒たちである。その生徒たちに、「何のために」という「目的」がハッキリしない課題を出しても、まともに取り組むはずがないのである。

この解決策は、生徒が本気で取り組みたいと思うような課題、本気で取り組まざるを得ない課題を戦略的に考え、授業に取り入れること以外にはない。この「本気」は「内省」に含まれる。

そして、そのような課題を集めた「中高一貫国語教科書」が作られるべきである。今、私は、「中高一貫国語教科書」を構想しながら実践と検討を重ねているところである。「アンサー・ボエム」の実践もその構想に含まれるもののうちの一つである。

（早稲田大学大学院教育学研究科博士後期課程／渋谷教育学園渋谷中学高等学校）